

音楽学習学会

第18回研究発表大会

2022年9月3日

聖徳大学

～ 第 18 回研究発表大会 概要 ～

期日：2022 年 9 月 3 日（土曜日）

会場：聖徳大学 1 号館（最寄り駅：常磐線「松戸」駅（徒歩 5 分）

大会スケジュール

| | | |
|-------------|-------------|---------------|
| 09:30～10:00 | 受付 教育学部棟 2F | (1219 視聴覚教室前) |
| 10:00～10:10 | 開会挨拶 | (1219 視聴覚教室) |
| 10:10～12:00 | シンポジウム | (1219 視聴覚教室) |
| 12:00～13:00 | 休憩 | |
| 13:00～13:30 | 2022 年度総会 | (1219 視聴覚教室) |
| 13:45～16:15 | 研究発表 | (A～D 各会場) |

参加費：

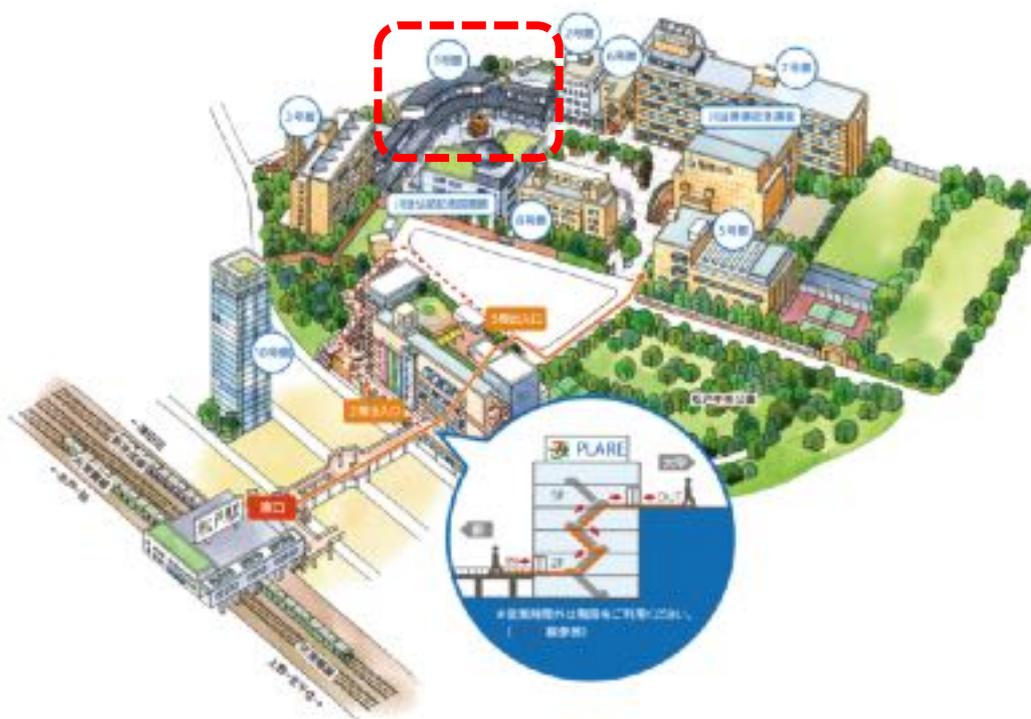
正会員・非会員一般：¥2,000，学生・非会員学生 ¥1,000

懇親会： 今大会において、懇親会の計画はございません。

会場案内

聖徳大学：最寄り駅「松戸駅」

JR 常磐線・JR 上野東京ライン，JR 乗り入れ地下鉄千代田線，新京成線
(東京駅より 28 分，上野駅より 20 分，池袋駅より 29 分，新宿駅より 34 分)



聖徳大学・聖徳大学短期大学部-東京成徳学園 HP より

松戸駅東口を出て真っ直ぐ進み，イトーヨーカドー内のエスカレーター（営業時間外は横の階段）を利用して5階へ。5階出口からキャンパスは目の前。所要時間は徒歩5分。
正門を通り，大会会場は奥の1号館になります。

会場・アクセス等の詳細は，聖徳大学の公式 Website よりご確認ください

<https://www.seitoku-u.ac.jp/>

プログラム

全体会：シンポジウム（10:10～12:00） 1219 視聴覚教室

再考:音楽科教育と ICT

音楽科の授業で「コンピュータ」「IT」などの活用がはじまったのは、およそ30年前である。当初は、「音楽はナマでなければ!」という考え方も根強く、音楽科でコンピュータを活用することに対する反対意見も少なくなかった。

時を経て、「IT」は「ICT」に変化した。そして、学校現場には一人一台タブレットが導入され、音楽の授業は大きく様変わりした。ICTの導入で音楽科の授業はどのように変化したのだろうか。子どもたちに身につけさせるべき音楽の力は変わったのだろうか。変わっていないもの、そして、変えてはいけないものはなんだろうか。

シンポジウムでは、ICTの提供側の立場である企業から、そしてそれらを活用する教員の立場から、音楽科教育とICTを含むテクノロジーの未来について、子どもたちに身につけさせたい資質能力を基軸にして議論したい。

話題提供者

- ・ 株式会社 教育芸術社
- ・ 株式会社 カワイ楽器製作所
- ・ Ableton 株式会社

進行・コメンテーター

- ・ 城 佳世（九州女子大学）

2022 年度 総会次第

- 議長選出
 1. 理事選挙結果報告
 2. 2021 年度事業報告
 3. 2021 年度決算報告
 4. 2022 年度事業計画
 5. 2022 年度予算案
 6. その他

※ 総会をご欠席の場合は、あらかじめ学会 HP 内「第 18 回大会出欠確認」より、総会委任状へのチェック入力にご協力をお願いいたします。

研究発表会場 A (1219 視聴覚教室)

座長:津田正之(国立音楽大学)

1. 中学校音楽科におけるカリキュラム・マネジメントの一試案
— 「ワーク・ローテーション」型授業の実践を通して—
島根大学大学院・倉吉市立河北中学校 朝日 翔三
2. 音楽的知識の定着を図る小学校音楽科の常時活動のための教材開発(1)
— 《やまびこごっこ》による音符の絵描き歌—
川村学園女子大学 奥田 順也
3. 高等学校における楽器の生演奏を取り入れた授業に関する研究
— オーケストラで使用される楽器の鑑賞授業に注目して—
広島大学大学院 西山 夏未
4. 特別支援学校(知的障害)における音楽科指導の変容
— P特別支援学校の取り組みを事例として—
熊本大学大学院 藤原 志保
熊本大学教育学部附属特別支援学校 上羽 奈津美
5. 教科教育法を通じた学生の音楽授業観の変容と課題
— テキストマイニング分析による—
国土館大学 室町 さやか

研究発表会場 B (1323 講義室)

座長:小池順子(千葉経済大学)

1. 石井漠の「舞踊教育」の萌芽の特徴とその本質 : 「原始舞踊」と「自然運動の模倣」
に着目して
エリザベト音楽大学大学院 沖中 春志郎
2. 若年層の音楽視聴習慣の実態とクラシック音楽に対する印象
目白大学 田中 樹里
3. 音楽を通じた国際交流事業の運営実態と特徴
— クラシック音楽を中心に事業を展開する協会を事例として—
広島大学大学院 棚倉 和沙
4. 高木東六のバリ留学日記 — 翻刻作業からみえてくる音楽家の実相—
島根大学 藤井 浩基

研究発表会場 C (1322講義室)

座長:三戸 誠(国立音楽大学)

1. プロジェクト型学習としての広島大学のオペラ制作
ーオペラ「魔笛」の制作における教師の働きかけに着目してー
広島大学 大野内 愛, 伊藤 真, 枝川 一也
2. 歌い方の個性を活かす学生ミュージカル
ー学生の音楽選好と歌い方に焦点をあててー
目白大学 小林恭子
3. 生涯音楽学習継続の困難さ ー合唱活動を中断した学習者のインタビューからー
広島大学大学院 小坂 光
4. 多重録音機器を用いた幼児対象の「えほんこんさーと」の実践
椋山女学園大学大学院 山上 京夏
椋山女学園大学大学 鈴木 あいり

研究発表会場 D (1321講義室)

座長:竹内貞一(東京未来大学)

1. 保育者養成校におけるピアノカリキュラムの検討
ーK短期大学のピアノカリキュラム変更による成果と課題ー
九州龍谷短期大学 藤井 菜摘, 峯 晋, 高井 翔海
2. 歌を伴う遊びの中に見られる子ども同士の関わり
ー保育所0歳児クラスでの観察調査に基づいてー
倉敷市立短期大学 別府 祐子
3. ピアノ実技の演奏技術向上において動画教材を導入することの効果
ー保育士・幼稚園教諭養成課程の授業実践よりー
目白大学 前田 菜月
4. 保育内容「表現」の変遷と課題 ー音楽表現からの検討ー
東京学芸大学 水崎 誠

研究発表要旨

| | |
|-------------------------|----------|
| 研究発表 A . . . 1219 視聴覚教室 | pp. 9-13 |
| 研究発表 B . . . 1323 講義室 | pp.14-17 |
| 研究発表 C . . . 1322 講義室 | pp.18-21 |
| 研究発表 D . . . 1321 講義室 | pp.22-25 |

発表要領

- 発表 : 20 分間, 質疑応答 : 5分間, 発表者交替・準備 : 5分間
円滑な進行にご協力お願いいたします。
- 会場には, PC 用のプロジェクター, スクリーン, 音声のスピーカー出力の準備があります。 PC, 接続アダプター, その他の特別な機器等は, 発表者各自でご準備下さい。また, 機器の接続確認につきましては, お昼休みをお願いします。
- 当日の配付資料がある場合は, あらかじめ印刷の上, ご持参下さい (例年, 多くて 1 発表につき 30 部程度です)。

中学校音楽科におけるカリキュラム・マネジメントの一試案

—「ワーク・ローテーション」型授業の実践を通して—

島根大学大学院教育学研究科（倉吉市立河北中学校）・朝日翔三

本研究は、音楽科の授業展開において、音楽活動を軸としながら一人一人の細かな見取りの実現をめざした、「ワーク・ローテーション」型授業の開発を目的とする。「ワーク・ローテーション」とは、学級を複数の小集団に分け、それらの小集団が短時間で複数の分野をローテーションしながら学習する授業形態で、筆者の考案による(右図)。

学習指導要領改訂により、各教科の学びを通して、見方・考え方を働かせながら資質・能力を高めることが求められるようになった。また、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学びを学校内に留めず、家庭や地域でも主体的な学びが行われるようにカリキュラム・マネジメントを進めていくことが求められるようになった。これにより、学び方・教え方において、教師は積極的に新たな試みを行うことが必要となってきた。例えば、各領域や分野の関連を図りながら学んだり、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、コンピュータや教育機器を効果的に活用したりすることである。改訂に伴い、教師はその後の授業をどうデザインすべきかを考え、年間35時間（第1学年は45時間）の限られた時間の中で、各分野のカリキュラム・マネジメントを行わなければならない。



本研究で提案する「ワーク・ローテーション」型授業では、一般的な音楽科の授業と異なり、1時間に複数の分野を扱う。様々なアプローチによって1つの学習目標にせまっていくため、学習目標に対して複合的に見ることができ、「音楽的な見方・考え方」を広げる一助となるのではないかと考えられる。また、1時間の中で各音楽活動をローテーションして行うため、各活動に要する時間は限られる。1分野にかかる時間は10分程度に抑えられるため、集中を持続することができ、それぞれの活動が深い学びにつながると考えられる。類似した学習方法に「モジュール学習」があるが、短時間のワークを学級全体で一斉に行う「モジュール学習」に対して、「ワーク・ローテーション」型授業は、確実に見取りや指導を行うことができる少人数指導も取り入れた形となる。

今回、第3学年を対象に、「形式」についての理解を深める「ワーク・ローテーション」型授業を実践した。歌唱、創作、鑑賞の3つの分野からのアプローチを計画し、タブレット端末を活用することで、教師一人で複数の活動をコーディネートし、生徒への指導、評価まで行うことを可能とした。

実践や生徒へのアンケートをとおして、幅広い音や音楽に触れることで、効率よく「音楽的な見方・考え方」を広げることにつながったことが分かった。また、各ワークの活動の時間を限定するため、集中力を持続した学びにつながった。また、主体的な学びへの参加が多く見られ、授業以外でもICTを活用しながら、対話的に音楽活動をする様子やGoogle Classroomのコメント機能を活用し、積極的に授業者に助言を求めてくる姿も多く見られた。これらICTの活用によって、評価のタイミングを分散させることも可能となり、実際に効率よく、丁寧な見取りを行うことができた。

一方で、分野ごとに取り組む学習内容への指示方法や、即時的な助言などの手立てについて課題が残っている。「ワーク・ローテーション」型授業をより効果的に実践するために、ICT活用を含め、様々な視点から更新を進め、検証していくことで、新たな音楽科教育の1つのモデルとしたい。

音楽的知識の定着を図る小学校音楽科の常時活動のための教材開発(1) — 《やまびごっこ》による音符の絵描き歌—

川村学園女子大学 奥田順也

西洋音楽の楽譜においてなくてはならないものの1つに音符が挙げられる。音符は演奏する音の高さと長さを示す。この音符が記譜された楽譜を読むためには、2つの理解が必要となる。1つめはその音符が何音符であるか、2つめは音部記号や調号が示す音符の音名や拍子記号が示す音符の拍数、つまりは音符の高さと長さに対する理解である。では、学校教育において音符に関する学習はいつから行われるのであろうか。現在、我が国の小学校音楽科で扱う2社の教科書（教育芸術社と教育出版）を概観すると、音符に関する学習は小学2年生から始まり、学年が上がるにつれて扱う音符の種類が適宜、増えていく。小学2年生では音の長さに関する学習が中心であり、小学3年生からは音の高さ、いわゆる「音名」を読む学習へと段階的に発展することが見て取れる。

現行の学習指導要領の解説では、〔共通事項〕(1)イの「音符、休符、記号の用語」の取り扱いについて、「指導にあたっては、単にその名称や意味を知ることだけではなく、表現及び鑑賞の様々な学習活動の中で、音楽における働きと関わらせて、実感を伴ってその意味を理解できるようにするとともに、表現及び鑑賞の各活動の中で、活用できるように配慮することが大切である」（文部科学省2018）と記されている。これは前述した2つのうち、後者と解釈できる。このように表現及び鑑賞の各活動の中で実感を伴って理解したり、活用したりするためには、音符の理解とともに、前者、つまりは各音符の名称と音符の形も覚える必要がある。しかしながら、小学校音楽科の目標においては「表現及び鑑賞の活動を通して」と記されていることから分かるように、訓練的に音符の名称や形を覚えるのは小学校音楽科の学習としてふさわしくないだろう。

そこで発表者は、児童が各音符の名称と音符の形の定着を図ることを目的とした、音楽科の常時活動のための教材を開発した。常時活動に着目した理由は、常時活動は「一定期間、継続的に行うことにより、基礎的・基本的な力をつけることをねらいとする」（阪井・酒井2015）ことができる、また、導入やアイスブレイクに継続的な常時活動として「音楽遊び」を行うことで、「和やかな気持ちで学習でき、音楽の基礎的な能力や、思考力・判断力等を培うことにつながる」（石上ほか2017）とされているからである。なお、先行研究を概観すると、小学校音楽科における音符の理解に関する研究はあるものの、児童が小学校音楽科の常時活動によって音符の名称や形の定着を図るような研究は見られなかった。

発表者が開発した教材は、歌唱教材《やまびごっこ》による音符の「絵描き歌」である。この楽曲は2社の小学校音楽科の教科書にも掲載されている、〔共通事項〕(1)アの音楽の仕組みの1つ「呼びかけと答え」を特徴とした歌唱教材である。この仕組みを用いれば、開発した教材を扱う学習活動の幅も広がると考えられる。また、絵描き歌は小学1年生の音楽科の教科書（教育芸術社）や、小学校中学年の「音遊び」としても紹介されている（今井2017）有効な学習活動と言える。本発表では、開発した教材の詳細を報告するとともに、授業実践における効果についても考察する。なお、発表者が《やまびごっこ》を「絵描き歌」とする研究を行うにあたっては、作詞者、作曲者ともに許諾を得ていることを付記しておく。

高等学校における楽器の生演奏を取り入れた授業に関する研究

—オーケストラで使用される楽器の鑑賞授業に注目して—

広島大学大学院生・西山夏未

オーケストラの楽器の生演奏を学校のカリキュラムに取り入れる授業については、特に小学校や中学校において実践が行われており、その効果が明らかになっている。生演奏が持つ力は子どもたちに感動を与え、音楽や楽器への興味・関心を引き出し、受け身になってしまいがちな鑑賞の授業を主体的なものにすることができる。また、児童・生徒が実際の楽器に触れられる環境や視覚的情報の多様さは、音楽の授業とその方法について広がりを持たせる。プロの演奏家を迎えての演奏や文化施設が主催するアウトリーチ活動が学校現場でも積極的に行われており、近年は都心部のみならず全国的に子どもたちが生演奏を聴く機会が増えている。一方で、高等学校の音楽の授業においてはそのような例は少なく、2020年に行った広島県の国公立高等学校の音楽担当教師を対象としたアンケート調査において、高等学校でオーケストラの楽器の生演奏を取り入れた授業を継続的に行うことが出来ないという回答が多く見られた。課題として、授業で生演奏を行う演奏者、楽器、予算の確保が難しいということが明らかになった。

本研究では、この課題を解決し、高等学校において生演奏を取り入れた鑑賞の授業を継続的に行う方法として、高等学校の音楽担当教師（授業者）と音楽の教員養成課程に所属する大学生（演奏者）による協働型授業を想定している。本発表では、まず、教師自身の生演奏を取り入れた鑑賞の授業の実践の一例を取り上げ、生演奏を取り入れた授業の有用性について検討を行う。次に、本実践において授業者が演奏者を兼ねているという点に着目し、教師による生演奏を取り入れた鑑賞の授業を行う場合のメリットや限界を検討した上で、高等学校における協働型授業の可能性と課題を見出す。

実践は授業者である筆者が大学で専攻しているヴァイオリンのソロの生演奏を鑑賞の授業に取り入れる形で行い、筆者が2022年4月から講師をしている広島県の公立高等学校の1年生の音楽の授業の一環として行った。

特別支援学校（知的障害）における音楽科指導の変容

－ P 特別支援学校の取り組みを事例として－

熊本大学大学院教育学研究科・藤原志帆

熊本大学教育学部附属特別支援学校・上羽奈津美

特別支援学校の学習指導要領において、知的障害のある児童生徒を対象とする場合の教科指導については、独自の目標と内容（発達段階別）が示されている。

平成 29 年に改訂された特別支援学校小学部・中学部の学習指導要領では、知的障害のある児童生徒に教育を行う特別支援学校（以下「特別支援学校（知的障害）」と示す。）における各教科の目標・内容は、育成を目指す資質・能力の 3 つの柱にもとづき、小中学校等の各教科との連続性・関連性を踏まえて構造的に示された。また、各教科等を合わせて指導を行う際にも、各教科等で育成を目指す資質・能力を明確にした上で、カリキュラム・マネジメントの視点にもとづいて計画・実施・評価・改善していくことが必要であると明示された。

特別支援学校（知的障害）小学部音楽科の目標は、育成を目指す資質・能力を「生活の中の音や音楽に興味や関心をもって関わる資質・能力」と規定し、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の 3 つの柱で整理されるようになった。また、「音楽的な見方・考え方」を働かせて、学習活動に取り組めるようにする必要があることも明示された。さらに、段階の目標が新設され、教科目標と段階ごとの目標も示されるようになった（従前は、小学部全体の目標が一つ示されていた。）。

特別支援学校（知的障害）小学部音楽科の内容は、「A 表現」（「音楽遊び」「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「身体表現」の 5 つの分野）と「B 鑑賞」の 2 つの領域および「共通事項」で構成されるようになった（従前は、「音楽遊び」「鑑賞」「身体表現」「器楽」「歌唱」で構成されていた。）。

P 特別支援学校では、平成 29 年に改訂された学習指導要領の全面実施前から、各教科の育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりやカリキュラム・マネジメントが行われてきた。小学部音楽科の指導内容について、平成 30 年度までは「生活単元学習」（各教科等を合わせた指導）で取り扱われることが多かったが、令和元年度から「音楽」（教科別の指導）で取り扱われることが多くなっている。

本発表では、P 特別支援学校小学部音楽科における、平成 28 年度から令和 3 年度までの 6 年間の年間指導計画と個別の指導計画の変遷を分析し、「音楽的な見方・考え方」を大切にしながら育成を目指す資質・能力を明確にした教科指導の導入によって、特別支援学校（知的障害）音楽科における授業の設定や児童の学習がどのように変容しているのかを報告する。

付記：本研究は、JSPS 科研費 JP18K02582 の助成を受けて行ったものである。

教科教育法を通じた学生の音楽授業観の変容と課題 ーテキストマイニング分析によるー

国士舘大学・室町 さやか

はじめに

教員養成課程の学生が音楽に苦手意識を持っていることは、複数の先行研究で述べられている。たとえば教員養成課程の学生の「音楽の授業」に対する意識を調査した氏家の研究では、ピアノや読譜の知識や技術面への不安の他に、「何を学ぶ授業なのかがわかっていない」「授業の仕方や展開がわからない」など、学生が指導法に関する不安を抱えていることが顕著となった(氏家 2019:108-109)。「音楽の授業で子どもが何を学ぶのか」「教師は何を教えるのか」を理解しないままに授業を構築することは不可能であるが、学生がこれらの不安を抱える一因として、学生が抱えている「音楽の授業」のイメージの中に、音楽の授業構築のために必要な教育内容の認識がないのではないかということが推察される。この問題意識のもと、本研究では教員養成課程の大学生が「音楽の授業」にどのようなイメージを抱いているのかを明らかにし、教科教育法の授業を通じてどのように音楽の授業観を変容させたかを分析した。

1. 研究方法

東京都の四年制大学の教員養成課程において「教科教育法(音楽)」を履修している学生45名を対象とした。第1回目の講義と模擬授業終了後の第13回目の講義において「小学校の授業で学ぶことは何か」という設問でレポートを出題し、レポートの内容をテキストマイニングで分析し、両者の比較を行った。

2. テキストマイニング分析の結果

上位頻出語のKWICコンコーダンス解析、共起ネットワーク分析、中心性分析を行い、第1回レポートと第13回レポートのテキストを比較した。その結果、学生は第1回の授業時、すなわち教科教育法受講前には、音楽の授業について「鍵盤ハーモニカ、リコーダー、木琴などの楽器の演奏の仕方を学んで合奏したり、歌唱したり、音符などの楽譜の読み方を学ぶ」ものであると捉えていたといえる。しかしながら学習指導要領を学び、自分たちで指導案を書き、模擬授業を行っていく過程で、学生の中で音楽の授業は「音楽」を中心に展開するものであるという意識が生まれ、歌唱や器楽演奏などの授業の活動を通じて子どもたちが主体的に考えたり感じたり、楽しんだり、知識や技能を身に付けたりするものであると捉えるに至ったことが可視化されている。この結果からは、学生たちが授業を通じて「音楽の教育内容」の存在を知覚し、意識するようになったという授業観の変容が読み取れるが、単元や題材などのまとまりの中で見通しのある授業の構築については言及されておらず、これらの点の意識にまでに至らなかったことが課題となった。

【発表要旨】

石井漠の「舞踊教育」の萌芽の特徴とその本質

－「原始舞踊」と「自然運動の模倣」に着目して－

エリザベト音楽大学 大学院生・沖中 春志郎

1. はじめに

子どもの心に合った身体表現は、子どもの成長に関わる活動の一つと考えられる。そこで筆者は、石井漠（舞踊家、1886-1962）の「舞踊教育」に着目した。石井は、わが国の新しい舞踊の先駆者である。先行研究として、板野（2016）は「石井の舞踊の根幹にはリトミックの理念が大きく反映している。」（板野 2016, p.92）と述べ、石井が考案し発表してきた「舞踊詩」に「リトミック」が含まれていることが明らかとなっている。石井の舞踊は、クラシックバレエとリトミックの柱が存在するため、音楽との繋がりが深い。本研究は、石井の「舞踊教育」の特徴を、石井の著書から明らかにすることを目的とする。

2. 石井が論じる「原始舞踊」

石井は、舞踊とは、原始時代から無意識のうちに肉体的・身体的な快楽を求めるうちに始まり、人間社会の中で進化して、今日の舞踊になっていると述べている。さらに舞踊は、運動全てではなく、自分にも他人にも快感を与え、肉体がリズムカルな運動を伴うことであり、舞踊者の表現意欲の発動から肉体のリズム運動だけでなく、精神的な快感に昇華する舞踊であり、郷土舞踊や民族舞踊もまた舞踊の一部であると述べ、「人間の舞踊的本能に出発し、舞踊的歓喜への欲求に根差している点においては、少しも違いない」（石井 1933, pp.5-6）としている。（石井 1933, pp.1-6）

3. 石井の提唱する「舞踊教育」の前段階「自然運動の模倣」

石井は「舞踊教育」をする前に「自然運動の模倣」をすべきと述べている。「自然運動の模倣」とは、戸外に出て自然現象や動物の模倣を即興舞踊ですることである。そして、身体を安全に支え、意志通りに動かせ、どのように踊れば能率的で安全かを考え、研究する方法であり、子どもの肉体的ハンディキャップから来る運動の限界を分かり易く説明し練習に移すことが教師の役目であると述べる。石井は、子どもが自分達のやりたい運動を楽に、愉快にすることが出来れば、舞踊の萌芽が、すでに子どもの心に植え付けられていると論じる。（石井 1936, pp.1-8）

4. 石井の「原始舞踊」と「自然運動の模倣」からみた「舞踊教育」の萌芽の特徴とその本質

以上から、「原始舞踊」で主張する、人間の舞踊的本能に出発し、舞踊的歓喜への欲求に根差していることと、「自然運動の模倣」で主張する、子どもが意志通りに能率的で安全に自分達のやりたい運動を楽に愉快にすることが出来るようになることは、どちらも踊る者の舞踊的欲求を主軸にしているため、これらが石井の「舞踊教育」の萌芽の特徴であると考えられ、いずれも舞踊のもつ本質から出発していることがわかる。

【引用・参考文献】

- 石井漠（1933）『舞踊藝術』玉川学園出版部 / 江崎公子編（1990）『音楽基礎研究文献集（第1期）第9巻』大空社
石井漠（1936）『子供の舞踊』フレーベル館 / 上笙一郎・富田博之編（1988）『児童文化叢書 30 第Ⅲ期』大空社
板野晴子（2016）『日本におけるリトミックの黎明期』ななみ書房

若年層の音楽視聴習慣の実態とクラシック音楽に対する印象

目白大学・田中樹里

本研究では、若年層のクラシック音楽に対するイメージを明らかにするために、保育士および教員養成に関わる学部・学科等に在籍する大学生・専門学校生を対象に、インターネットによる調査を行った。調査は2022年6月から7月に実施した。質問項目は「日常生活における音楽への接し方・頻度」と「クラシック音楽について」で構成し、179名（大学生162人；男性50人；女性112人、専門学校生17人；男性2人；女性13人；回答なし2人）より回答を得た。

調査の結果、「日常生活における音楽への接し方・頻度」では、全体の約80%が毎日音楽を聴いている。さらに、1日に1時間以上3時間未満の音楽視聴習慣があるのが約40%、15分以上1時間未満が約40%であった。聴いているジャンルはJ-POP、アニメ、K-POP、クラシックの順であった。約80%がサブスクリプション・サービスを利用しており、サブスクリプション・サービス以外では90%以上がYouTubeを利用していた。サブスクリプション・サービスやYouTubeによって、音楽は若年層に身近な存在である一方で音楽の価値の低下が懸念される。

「クラシック音楽について」では、これまでクラシック音楽に触れた場面については約90%が学校の授業を挙げ、次いで習いごと、映画、音楽番組であった。学校の授業以外でのクラシックの楽器や歌の経験について約60%が鍵盤楽器の経験者であった。クラシック音楽に対するイメージをSD法で測定した結果、「上品な」「美しい」「難しい」「長い」という印象を持っており、学校教育で扱う楽曲の影響があると推察される。さらに、音楽専攻の学生は音楽専攻以外の学生に比べて「好き」「興味深い」「熱い」「日常的な」、演奏経験のある者はない者に比べて「好き」「美しい」「興味深い」「親しみやすい」という印象を持っており、クラシック音楽に接する経験は「好き」や「興味深い」というイメージに繋がるといえる。

音楽を通じた国際交流事業の運営実態と特徴 ークラシック音楽を中心に事業を展開する協会を事例としてー

広島大学大学院生・棚倉和沙

近年、国際化の進展や多文化共生社会構築に伴い、多様な価値観の尊重や文化理解をうながす国際交流は、今後も需要がさらに高まる傾向にある。文部科学省（2022）は、「高等教育を軸としたグローバル政策の方向性」において、日本人学生は海外に飛び出して日本では得がたい様々な経験を積み、多様な価値観を持つ世界中の人々との交流により、異文化理解を促進し、また自らのアイデンティティを確立し、国際的素養を涵養する必要があると指摘している。中でも音楽を通じた国際交流は、音楽という身近な存在を通して、国境や言語、人種を超えたつながりや文化に対する相互理解を深めることが期待できる。音楽を通じた国際交流事業は、国や文化庁が主催する芸術家を対象とした専門的な研修事業、民間団体が主催するプロやアマチュア向けの海外公演や音楽講習会、地方自治体がおこなう体験型ワークショップなど、交流の目的や対象者に応じて多層的なレベルかつ重層的に様々な方法でおこなわれている。

しかし、一般に国際交流事業には、一時的で楽しいといった短期的かつ表層的な催し物になる場合が多いという課題が残されている。事業の参加者が、多様な価値観に触れ、深い文化理解を得るためには、定期的かつ継続的に国際交流事業を実施する必要がある、それらの運営が可能な国際交流団体が必要であると考えられる。同様の課題は、音楽を通じた国際交流にもあてはまるものであり、参加者に対して、質を確保しながら定期的かつ継続的に交流の機会を創出する国際交流団体が必要であり、それらの運営面での特徴を明らかにする必要がある。

そこで本研究では、クラシック音楽を中心に国際交流事業を展開する協会を事例として取り上げ、運営者へのインタビューをもとに運営実態を調査し、定期的かつ継続的に事業をおこなうための運営面での特徴を明らかにする。本協会は「文化や言葉よりも、繋がるものがここにある～音楽+国際交流～」といった協会理念を持ち、クラシック音楽を通じて定期的かつ継続的に事業を展開している。主な事業内容は、世界的著名な音楽ホールや教会での海外演奏会と現地の音楽団体との交流会の実施、若者に対する音楽研修旅行等である。本研究では、コンサート・マネージャーを務める運営者1名に対する半構造化インタビューのデータを、①事業の企画内容 ②常連参加者の獲得 ③資金調達におけるネットワークの3つの観点に着目して分析した。

【参考 Web 資料】

- ・文部科学省（2022）「高等教育を軸としたグローバル政策の方向性」

https://www.mext.go.jp/content/220725-mxt_koutou03-000024166.pdf

高木東六のパリ留学日記 —翻刻作業からみえてくる音楽家の実相—

島根大学・藤井浩基

本研究は、高木東六（1904-2006）が1927年から1931年にかけて書き留めていた自筆の日記のうち、1928年～1932年のパリ留学時代を中心に翻刻と解題を行うものである。

高木は、昭和から平成にかけて活躍した音楽家で、作曲家やピアニストとしてだけでなく、音楽番組の司会や審査員を務めるなどテレビ出演で茶の間にもよく知られた。著書や新聞・雑誌への寄稿も多く、マルチタレント的な音楽家の先駆けといえる存在であった。《水色のワルツ》や軍歌《空の神兵》といった高木の代表曲は、シニア世代に現在でもよく知られている。

高木の没後、5冊の日記が遺族によって自宅から発見された。日記は約1000頁に及び、東京音楽学校での学生時代、パリ留学に至る経緯、留學生活や1930年前後のパリ音楽界の様子が実に生き生きと描写されている。パリでの高木は、ヴァンサン・ダンディが設立に携わったスコラ・カントルムに在籍しピアノと作曲を学んだ。ラヴェルやラフマニノフらの実演に接した率直な印象、つらい音楽の研鑽、同時期の日本人留学生との交流なども記述されている。戦前の高木の楽譜や資料の多くは戦災で焼失したが、奇跡的に残ったこれらの日記は、1930年前後の音楽事情を物語る一級の資料である。

現在、発表者は日記を精読し翻刻する作業を続けている。日記の翻刻には、高木独特の癖のある手書き文字を解読するスキルが必要で、慣れるまでにかかなりの時間を要した。ほぼすべてが万年筆で書かれており、日本語では旧字体が多い上に、時折フランス語によるメモが付記されている。

高木は80歳をこえてから自伝『愛の夜想曲』（1985）を上梓した。自伝のほか高木が後年執筆、口述したものには、日記の記述と整合しない点が少なくない。こうした齟齬を他の資料を援用して埋めることにより、高木の留学と音楽家としての実相を明らかにしていきたい。

本研究は、JSPS 科研費（課題番号 19K00134）の助成を受けている。日記は遺族の高木緑氏より提供されている。

プロジェクト型学習としての広島大学のオペラ制作 —オペラ「魔笛」の制作における教師の働きかけに着目して—

広島大学・大野内 愛
伊藤 真
枝川 一也

広島大学教育学部音楽文化系コースのオペラ制作の授業（以下「オペラ実習」）では、声楽専攻生以外の学生も履修することができ、その役割は、キャストや伴奏ピアニストはもちろんのこと、演出、照明、衣装、大道具、小道具、対訳、舞台設営、広報など多岐にわたる。年2回の発表の場に向けて、オペラを題材としたアンサンブルの表現力向上だけでなく、オペラ制作そのものを体験し、自分たちの力で協働して創り上げていくという、プロジェクト型学習の形式をとっている。2022年4月には、W.A.モーツァルト作曲「魔笛」の野外公演を実施し、約400名の観客が来場した。

これまで発表者らによる調査では、学習者たちはオペラ制作の活動に対して強い関心と快感情をもって粘り強く取り組んでおり、チームとして協働学習を行った姿が想起された。その中でオペラ実習における制作プロセスに着目し、学習者の活動そのものや、知識・技能習得における試行錯誤のプロセスを学習者の視点から明らかにした（大野内ら 2021）。音楽的な協働学習のプロセスとその要因を、複数の学習者の語りによって可視化して検討することができたが、学習者のこうした学びには、指導者のどのような働きかけが影響しているのだろうか。またどのような働きかけがあれば、学びがより促進されるのだろうか。

先行研究では、プロジェクト型の学習プロセスの各段階に応じた指導者の適切なマネジメント方略が提示されているもの（Mergendoller et al., 2006）や、議論を開始したり促進したりするための指導者による質問について検討されているもの（Zhang et al., 2010）などがあるが、音楽学習の文脈での研究が進んでいない。音楽学習におけるプロジェクト学習では、仲間と協働して課題を克服するにとどまらず、作品としてのクオリティを追求する、つまりよりよいものを目指すという点が、芸術作品を制作するプロジェクトの本質となる。

本発表では、2022年4月に実施されたオペラ「魔笛」の制作プロセスにおける各段階での指導者の働きかけと、学習者による各段階での思いとの関連を検討することにより、音楽学習の文脈からプロジェクト型学習での学習者の学びを促進するための指導・支援のあり方を考察する。

【引用・参考文献】

- Mergendoller, J., Markham, T., Ravitz, J., Larmer, J. (2006) Pervasive management of projectbased learning, *Handbook of classroom management: Research, practice, and contemporary issues*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, pp.583-615.
- 大野内愛・伊藤真・枝川一也・樋口史都（2021）「学習者の語りからみるオペラ制作の試行錯誤—COVID-19パンデミック下での活動に着目して—」『音楽学習研究』17巻, pp.1-12.
- Zhang, M., Lundeberg, M., McConnell, T. J., Koehler, M. J., Eberhardt, J. (2010) Using questioning to facilitate discussion of science teaching problems in teacher professional development, *The Interdisciplinary Journal of Problem-Based Learning*, 4 (1) , pp.57-82.

歌い方の個性を活かす学生ミュージカル —学生の音楽選好と歌い方に焦点をあてて—

目白大学・小林恭子

幼児を対象とした教育者養成校の多くは、特別行事や授業の一環として、学生による子ども向けの劇を上演している。例えば、筆者の勤務校における子ども学科では、毎年「まみむめめじろかきくけこども」という発表会を行い、1年生と上級生の有志が参加している。内容は、学生が考案した物語、脚本、振付、音楽等で進む幼児を対象とした創作劇である。ここでは、図画工作・音楽・体育の実習科目を中心にその科目の持つ特徴を統合することで、幼児教育者として質の高い、感性豊かな学生の養成に寄与しているという。また、地域の幼児を招待することで、地域密着型行事として位置付けられている（おかもと他、2010）。同様の行事や授業を行っている養成校の実践報告も多くあり、これらの実践が学生にとって貴重な学びの場になっていることがわかる。

筆者は、小学校教員養成を目的とする学科の教員をしており、毎年ゼミの発表としてミュージカルの上演を行っている。上記のような大型行事ではなく、15名から20名程度が全員キャストとして出演し、裏方も全員で行い、観客も地域の児童・幼児ではなく、保護者や友人・教員を対象とする内輪向けの発表会であるが、先述した学科大型イベントと同様に学生は多くの学びを得ており、このイベントの後に大きく成長した姿を見ることが出来る。また、多くの学生が、人前での音楽演奏に抵抗がなくなり、歌う事や音楽がより好きになっている。

このゼミ発表会の特徴は、音楽演奏発表がメインであるという点だ。第1回は音楽発表会であり、グループごとに合唱や合奏を披露し、最後に全員で合奏をした。何らかの楽器経験や合唱経験などがある学生が多かったため、それを活かした。しかし、「楽譜は読めない、楽器もできない、カラオケで歌うことは大好き」という学生が増えた時に、ミュージカルという演奏形態を選んだ。ミュージカルは、キャラクターが大切であり、合唱のように声質をそろえてバランスを整えながら歌うシーンは少ない。学生は、自分の好きな歌い方ができるため、楽譜が読めなくても楽器ができなくてもある程度自由にできる。この発表会は、全員がソロで歌うようにしている。

学生の音楽選好の傾向は、多様化している。現代は、サブスクリプションや動画配信サービス等で音楽サービスを受け、サイトにアクセスして音楽に接触し、音楽で遊び、広報の方法も以前とは変わっている（油井 2022、本学授業資料）。ゼミ学生に、好きな音楽についてプレゼンテーションをさせた際、音楽の好みはアイドルからアニメ声優が歌ったもの、K-POP、J-POP、長編アニメーション映画音楽、吹奏楽等の音楽、合唱曲、昭和の歌謡曲、クラシック音楽等年々幅広くなっている。それらの歌い手は、歌い方が統一しておらず歌い方に特徴がある。ミュージカルはそのほとんどの歌い手の特徴を網羅する、唯一のジャンルであると筆者は想定している。

以上のことをふまえて本発表は、学生の音楽選好の多様性とその歌い方の特徴を上げる。そして、さまざまなミュージカルの演目とその歌い方の特徴とを比較・検証する。そして、ミュージカル歌唱に必要なことは、どのジャンルにおいても発音と表現力であることについて考察する。

参考文献：おかもとみわこ・高橋弥生・糸井志津乃ほか（2011）「感性豊かな幼児教育者を育成するために」『目白大学高等教育研究』第17号、pp.109-116

生涯音楽学習継続の困難さ ー合唱活動を中断した学習者のインタビューからー

広島大学大学院・小坂 光

成人の音楽学習における知のあり方について、川村（2005）は音楽の技能や知識の獲得を第一義とする目的合理的な学習から、音楽と人間との関係から生成する個別的、一回的な意味に焦点をあてることによって、指導者や共同学習者とのかかわりの中で意味を編み直していく意味生成的な学習への転換を示唆している。クラントン（2005）は、生涯学習の文脈での学習について「経験によってもたらされる思考、価値観、態度の持続的な変化」（p.5）と定義している。学習は、状態や結果ではなく、自分のなかに存在する思考や価値観の変容が重要なのである。また、筆者はこれまで、生涯音楽学習の場が音楽の技術習得だけではなく、状況的学習の場や実践コミュニティの場となりうるため、共同学習者間や指導者・学習者間の関わり方も学習の一環であると指摘してきた（小坂2021a, b）。学習者の生活スタイルに合った学習の頻度や強度、団体と学習者の関わりが存在して初めて共同的な生涯音楽学習が成立する。しかし、共同学習の性質をもつ合唱活動では、全員が同じ時間・場所に参加できない状況も多々存在し、その場に参加できない学習者は継続を断念してしまう。生涯学習研究では同じ活動や学習の継続が重要視される傾向にあるが、学習を継続しないという選択をした人が、その後過去の学習経験をどのようにとらえているのか、過去の学習経験が現在にどのような影響を与えているのかを明らかにすることは、生涯学習の発展に寄与するであろう。

小坂（2019）では生涯発達段階を視点として、合唱活動を継続している学習者の語りを分析し、成人前期には就職や結婚、出産などのライフイベントと学習の両立に対する不安の生起を明らかにしたが、この時期のライフイベントは生活への影響も多く、それまで学習の強度が強かった人でも、学習の中断という選択をする人が多い。学習を再開するにあたっては、学習の強度が強い人ほど生活スタイルと学習をどのように両立していくかについて考えるだろう。

学習を中断したという対象者へのアプローチが難しいため、本研究ではインタビューを承諾いただけた1名の対象者の語りの分析をとおして、生涯音楽学習の継続の難しさに存在する問題や、過去の学習経験をどのようにとらえているのか、過去の学習経験が現在にどのような影響を与えているのかについて明らかにすることを目的とする。

川村有美（2005）「関係論的な学びとしての成人音楽学習」『音楽文化の創造』第36巻，pp.62-65
クラントン，P. A. [入江直子，豊田千代子，三輪健二訳]（2005）『おとなの学びを拓くー自己決定と意識変容をめざしてー』鳳書房

小坂光（2019）「合唱活動参加者の音楽学習に対する認識の変容ー生涯発達を視点にー」『音楽学習研究』第15巻，pp.21-30

小坂光（2021a）「合唱活動の場における相互行為」『教育学研究紀要（CD-ROM版）』第66巻，pp.168-173

小坂光（2021b）「合唱活動参加者の意識変容ー共同学習者間の相互行為・実践コミュニティ参加の視点からー」『音楽文化教育学研究紀要』No.33，pp.31-37

多重録音機器を活用した幼児対象の「えほんこんさーと」の実践

相山女学園大学大学院・山上京夏

相山女学園大学大学・鈴木あいら

近年、教育現場では、文部科学省から発表された「GIGA スクール構想」や、新型コロナウイルスの感染防止等の影響により、児童・生徒が1人1台端末を所有するのも珍しくない。それにより音楽科においても、創作の授業において、楽譜作成ソフトなどを用いて、タブレットやPC内で創作を完結するような授業も散見するようになった。

昨年の音楽学習学会第17回研究発表大会では、昭和22年学習指導要領（試案）から現行学習指導要領にいたる「創作」分野の変遷について再整理した後、このような近年の状況について述べ、今後の授業の一試案として、多重録音機器「ルーパー」を使った創作の授業を提案した。

今回の研究では、その多重録音機器による創作の可能性をさらに探るために、新たに、絵本を元にした創作を行い、幼児を対象とした「えほんこんさーと」を行った。具体的には、スライドで絵本を映し、朗読とあわせて多重録音機器で音や旋律を重ねていくスタイルのコンサートである。今回は、「おおきなかぶ」（ロシア民話/A.トルストイ再話/内田莉沙子訳/佐藤忠良画 福音館書店）と、「はらぺこあおむし」（エリック・カール作/もりひさし 偕成社）を元にして、創作した。

絵本には、その面白さが、「反復」や「増幅」によって創り出されることが多い。多重録音機器は、キーボードやマイク（声）で演奏した音を録音し、繰り返し再生したり重ねていったりする特性を持つことから、絵本の「反復」や「増幅」といった効果を聴覚的にも明らかにすることができる。この2作品においても、このことを念頭に創作した。

作品は、2022年7月に相山女学園大学附属幼稚園にて、年少・年中・年長それぞれを対象に「えほんこんさーと」として披露した。「えほんこんさーと」の中では、園児が絵本の文章を読みあげる声をその場で録音し、その声を繰り返し再生するといった、参加型の場面も用意した。

本発表では、多重録音機器を活用した、絵本と結びつけた創作や「えほんこんさーと」の開催について提案し、教育現場におけるその可能性について検討する。

保育者養成校におけるピアノカリキュラムの検討 —K 短期大学のピアノカリキュラム変更による成果と課題—

九州龍谷短期大学・藤井 菜摘 峯 晋 高井 翔海

保育者養成校において、『バイエルピアノ教則本』などのクラシックピアノのための練習曲が教材として用いられることが多い。発表者らの勤務校である K 短期大学も例外ではなく、これまで長きにわたって『教職課程のための大学ピアノ教本—バイエルとツェルニーによる展開—』（以下、『大学ピアノ教本』）に収録されている練習曲と、保育現場で扱われる幼児曲とを並行して取り組む個人レッスン形式のカリキュラムが組まれていた。しかし、K 短期大学は入学時点でピアノ初心者であるという学生が約半数を占めており、学生の実態としては、『大学ピアノ教本』の譜読みに膨大な時間を費やし、実際にピアノを弾くことや、幼児曲の練習にまで手が回らないというものであった。

ここで、保育者に求められているピアノの技術について考えると、子どもたちの歌を支えるための基本的な伴奏技術、子どもの声の高さに合わせて移調する技術、保育・教育の場面に応じて曲調（テンポや長短など）を変化させる技術などが挙げられる。これらの技術は、再現芸術であるクラシックのピアニストに必要な技術とは大きく方向性が異なる。『大学ピアノ教本』を根底に据えたカリキュラムからの脱却を図るべく、K 短期大学は 2021 年度 4 月からピアノカリキュラムを大幅に変更した。すなわち、1 年生前期に開講されているピアノ A の内容を、コードネームを中心とした基本的な音楽理論と、それに関連した幼児曲を並行して扱う一斉指導とし、ピアノ B（1 年生後期開講科目）・ピアノ C（2 年生前期開講科目）の内容を、コードネームを用いた幼児曲を扱う個人レッスンとした。今年度は、新カリキュラムを受講した学生が 2 年生となる最初の年である。

本研究は、ピアノ B・ピアノ C で個人レッスンを担当している非常勤講師 7 名を対象として半構造化インタビューを行った内容を質的に分析し、ピアノ A で学んだ内容がピアノ B・ピアノ C にどのように結びついているか、成果と課題を詳らかにすることを目的とする。

歌を伴う遊びの中に見られる子ども同士の関わり — 保育所 0 歳児クラスでの観察調査に基づいて —

倉敷市立短期大学・別府 祐子

本研究の目的は、保育所0歳児クラスに属する2歳未満の子ども同士が、歌を伴う遊びの中で、どのように関わり合うのかについて、Communicative Musicality理論(マロックとトレヴァーセン, 2018)¹⁾を手がかりとして明らかにすることにある。

わが国における1・2歳児の保育ニーズの高まりは著しく、厚生労働省によると、2020年の1・2歳児の保育所利用率は50.4%と半数を超えている²⁾。低年齢から入所する子どもにとって、多く場合、保育所等は初めて家族以外の集団と生活する場となり、その中の様々な人と関わりながら生活時間の大半を費やす場となる。そこでの人間関係が社会性の発達に大きな影響をもつことは言うまでもない。とりわけ、月齢・年齢の近い子ども同士の関わりは、家庭での大人との関わりやきょうだい同士での関わりでは得られない経験で、**321講義室**で特異である。だが、3歳未満の子ども同士の関わりについては、研究の蓄積が十分になされているとは言えない。1・2歳児の保育所利用率の高まりを考慮しても、集団生活の中において、子ども同士でどのように関係を構築していくのか、その過程を明らかにすることは喫緊の課題であると言えよう。

この課題に迫る手がかりとして用いたCommunicative Musicality理論は、乳児と母親の応答的なやりとりに見られる、旋律的でリズム的な共創造性を証明しようとしたことに端を発している。ここで、Musicalityは「文化学習への人間としての希求の表れであり、他者と共感的に働き、記憶し、計画する生得的なスキルの表れ」(マロックとトレヴァーセン, 2018, p.6)³⁾と定義され、人間の多様なコミュニケーションの基盤は、人間が生得的にもつMusicalityによって成り立つと捉えられている。

本研究で特に着目した事象は、歌を伴う遊びの中での関わりである。エッケダールとマーカー(2018)が、「乳児がヒトの文化の儀式レベルに参加する最初の入場門となるのが、遊び歌と、それに関連する形式的な構造を持った遊びである」(p.242)⁴⁾と述べるように、歌を介した関わりは、乳児にとって、人と人とのコミュニケーションの基盤となり得るものであると言える。今川(2020)はCommunicative Musicality理論を背景に、1歳5ヶ月の子どもと養育者とのわらべうた遊びに見られる音楽性を分析し、子どもと養育者との間に「相互調整しながら『形式をもつ歌遊び』を共創造する関係」(p.207)⁵⁾が成立していることを示した。これらは共に、養育者と子どもとの関わりについて言及しているが、これらに見られる音楽性は、子ども同士でも捉えられると考える。

本研究の対象は、X保育園0歳児クラスである。20XX年10月から6ヶ月間、概ね週1回の頻度で観察調査を実施した。調査は、午前中の保育時間の一部において実施し、2台のビデオカメラで記録した。分析には、アノテーションソフトELANを用いた。

発表では、保育者と子どもによって開始される歌を伴う遊びを契機に、子ども同士で関わり合い、ナラティブを共創造していく場面を抽出し、その発現機序について詳述する。

- 1) スティーヴン・マロック、コルウィン・トレヴァーセン(2018)「第1章 音楽性：生きることの生気と意味の交流」スティーヴン・マロック、コルウィン・トレヴァーセン編著、根ヶ山光一、今川恭子、志村洋子、蒲谷慎介、丸山慎、羽石英里監訳(2018)『絆の音楽性』音楽之友社、pp.1-11.
- 2) 厚生労働省(2021)「保育所等関連状況取りまとめ(令和3年4月1日)」(<https://www.mhlw.go.jp/content/11922000/000821949.pdf>, 参照2022/6/1)
- 3) 前掲書 1)
- 4) バトリシア・エッケダール、ビョルン・マーカー(2018)「第11章 乳児の発達における『音楽』と『遊び歌』：解釈」スティーヴン・マロック、コルウィン・トレヴァーセン編著、根ヶ山光一、今川恭子、志村洋子、蒲谷慎介、丸山慎、羽石英里監訳(2018)『絆の音楽性』音楽之友社、pp.231-250.
- 5) 今川恭子(2020)「第14章 音楽性の発達のな変化：第一次的音楽性から第二次音楽性へという仮説」今川恭子編(2020)『わたしたちに音楽がある理由 音楽性の学際的探求』音楽之友社、pp.196-208.

ピアノ実技の演奏技術向上において動画教材を導入することの効果 ー保育士・幼稚園教諭養成課程の授業実践よりー

目白大学・前田菜月

筆者は保育士・幼稚園教諭養成課程において、ピアノ演奏初心者のための音楽実技科目を受け持っている。2020年度、新型コロナウイルス蔓延のため高等教育機関の多くが遠隔授業となり、その受持ちの実技科目においても遠隔授業を行うことになった。完全な遠隔授業では、テレビ会議システムを使用した同時双方向型と動画配信などによるオンデマンド型を使った。半期後からは、同じ内容を一部対面授業で行うことになったが、同時双方向型やオンデマンド型も引き続き使用した混在した方法によって行った。その後、完全な対面授業と、完全にオンラインで行った遠隔授業、オンラインも混在する一部対面授業を受講した学生による能力と学生の記述による感想の比較を行い、遠隔授業のもと、オンラインを使用したピアノ実技学習はどの程度の有効性があるのか、オンラインは対面授業と比較し、どの様な点が欠け、どのような点が通常の学習にも生かせるかを検証した。結果、オンラインによるピアノレッスンはピアノ曲の学習進度については損なわないが通信や環境の影響を受けること、実技や楽典の動画については履修した学生の満足度は高く学習進度においても非常に有効とわかった。

以上のことから本研究では、特に動画教材に着目し、ピアノの実技科目の対面授業において、一部オンデマンド型による演奏技術の向上を目指した動画教材を導入し学習することの効果を探る。

対象の授業は基礎的な音楽理論（楽典）の学習と、ピアノ実習で演奏技能と表現技術を身に付けることを目的としている。

授業では、対面授業での講義形式による音楽理論（楽典）の学習とピアノの個人レッスンの他に、オンライン上での学習管理システムも同時に利用した。ピアノ実技の課題曲である指使いの曲とピアノ演奏初心者用の曲について、理論や演奏技術の向上のための指の使い方、練習方法などについて説明しながら演奏した動画を掲載した。受講学生は、自宅でのピアノ実技練習の際にそれらを各自視聴し学習に利用した。授業最終回に、受講学生に授業や動画を使用した感想等について記述式のアンケートを行った。

アンケートから、受講学生それぞれの能力差から動画に対する感じ方の違いが分かった。そこで受講学生による記述式のアンケートの結果と、授業開始時の音楽経験、学習進度の違いに分け、記述内容を分析し、どのような学習者に対して動画教材のどのような点が有効なのか、検討した。

最後に考察を行い、動画教材の学習内容だけでなく、今後の音楽やピアノ実技学習内での有効な動画の内容や、動画の可能性について述べる。

保育内容「表現」の変遷と課題

—音楽表現からの検討—

東京学芸大学・水崎 誠

保育内容「表現」は、平成元年改訂の『幼稚園教育要領』と平成2年改定の『保育所保育指針』において、5領域の1つとして誕生した。その後、数回の改訂（改定）を経て、今日に至っている。本発表では、『幼稚園教育要領』と『保育所保育指針』における領域「表現」の変遷を、音楽表現の点から検討し、今後必要とされる実践上の課題を明らかにすることを目的とする。変遷を確認する際は、領域「音楽リズム」（『幼稚園教育要領』）と領域「音楽」（『保育所保育指針』）を含めて、検討していく。

『幼稚園教育要領』は、昭和31年に刊行され、39年、平成元年、10年、20年、29年と改訂されている。昭和39年の『幼稚園教育要領』では、保育内容として「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」及び「絵画制作」の6つが挙げられた。領域それぞれには「幼稚園教育の目標を達成するために、原則として幼稚園修了までに幼児に指導することが望ましいねらい」が挙げられた。音楽リズムの事項（ねらい）は「1 のびのびと歌ったり、楽器をひいたりして表現の喜びを味わう。」として8つ、「2 のびのびと動きのリズムを楽しみ、表現の喜びを味わう。」として7つ、「3 音楽に親しみ、聞くことに興味をもつ。」として6つ、「4 感じたこと、考えたことなどを音や動きに表現しようとする。」として5つが挙げられた。領域「音楽リズム」は、平成元年の改訂により、領域名からなくなり、新たに領域「表現」が誕生した。

『保育所保育指針』は、昭和40年に策定され、平成2年、11年、20年、29年で改定されている。昭和40年の『保育所保育指針』では、年齢区分に従って保育内容の領域を示している。4歳児以上では「健康」「社会」「言語」「自然」「音楽」及び「造形」の6つが挙げられ、『幼稚園教育要領』の6領域におおむね合致するようになっている。たとえば4歳児の保育内容では「2. 保育のねらい」として「（9）歌う、音楽を聞く、身体の動きや楽器などでリズムを表現する機会を与え、音楽に対する楽しさをじゅうぶんに味わわせる。」があり、「3. 望ましいおもな活動」として「（1）音楽に親しみ、自分の好きな曲を選んで聞く。」や「（2）自然な声で、はっきりと歌う。」など9つが挙げられている。領域「音楽」は、平成2年の改定により、領域名からなくなり、新たに領域「表現」が誕生した。

領域「表現」は、『幼稚園教育要領』における領域「音楽リズム」と「絵画制作」、あるいは『保育所保育指針』における領域「音楽」と「造形」のそれぞれを単純に合わせたものではない。幼児の表現を根本的に問うものとして、領域「表現」は誕生した。保育における音楽表現は、領域「表現」の趣旨を踏まえた場合、どのような実践が求められるのであろうか。この点について、『幼稚園教育要領』と『保育所保育指針』の変遷をもとに、本発表では検討する。

[本発表は、令和2-4年度学術研究助成基金・基盤C（課題番号20K02849）「幼児の音楽的モチベーションを高める表現遊び指導法の開発」（代表）の助成を受けている。]